

島崎藤村に見るジャン＝ジャック・ルソー(1)

— 『告白』 のもたらしたもの¹ —

柏木隆雄

要旨

明治以降の日本の近代社会に与えた思想的影響の大きさは、「おそらくマルクスに次ぐ位置を占め」、「特に『告白』を中心とする自伝は19世紀以降の近代文学の一つの方向を決定づけた」と小西嘉幸が述べるとおり、ルソーの『告白』は明治24年森鷗外によって独訳から『懺悔記』と題されてその一部分が新聞に訳載され、ルソー生誕200年を記念する形で石川戯庵の完訳『懺悔録』が大正元年に出て、たちまち多くの版を重ねた。同じく大正に入って他の自伝的作品も初訳が出て、ルソーの影響は従来の民権思想界から文学の世界に移って行く。おそらくは明治末年から覇を称えた自然主義文学の「告白」的志向もそれを迎える風潮を作ったに違いないが、その一方の雄である島崎藤村は、すでに英訳でルソーの諸作を知り、中でも『告白』にもっとも心を動かされた。

本稿では、藤村の『破戒』、『新生』といった従来影響が指摘されている小説を中心に藤村におけるルソー像を再検討する。

キーワード：島崎藤村、ジャン＝ジャック・ルソー、北村透谷、『破戒』、告白文学

1. ルソーの日本移入

ジャン＝ジャック・ルソーという名を日本に最初に知らせた著作が、明治15年(1882年)、その8年前にフランスから帰国して政府の委嘱による翻訳やフランス語塾で子弟の教育に当たっていた中江兆民の試訳によるルソーの『社会契約論』、およびその漢訳と漢文による注解を付した『民約訳解』であることはよく知られている。兆民はさ

1 本稿は2012年9月14日、中央大学駿河台会館で行われたルソー生誕300年記念国際シンポジウム「ルソーと近代：ルソーの回帰、ルソーへの回帰」における発表原稿に加筆したものである。

らにその翌年、同じルソーの『学問芸術論』を『非開化論』として出版しているが、いずれも完訳ではないものの、折からの自由民権運動と相まって、中江兆民の名とともに、ルソーは一時に日本の知識人に知られることになった。

しかし兆民によって鼓吹されたルソーの思想は、実際において、必ずしも日本の政治思想への熟成に大きな力を発揮する形には進まなかったように思われる。ルソーの著作が日本にもっとも大きな足跡を残すのは、ルソーの晩年の著作『告白』*Les Confessions* (第1部1781、第2部1788) だろう。小西嘉幸が、明治以降の日本の近代社会に与えたルソーの思想的影響の大きさは「おそらくマルクスに次ぐ位置を占め」、「特に『告白』を中心とする自伝は19世紀以降の近代文学の一つの方向を決定づけた」と述べているとおり²、明治後半期以後の日本文学の大きな流れであり、しかも日本文学に独自に発達したと思われる「わたくし小説」の成立に、ルソーの自伝『告白』が与えた影響は、きわめて大きなものがあった。

いまさら説くまでもないが、その『告白』は明治24年(1891年)森鷗外によってドイツ語訳から『懺悔記』と題されて、その第1巻の冒頭、1712年から1719年までと、第7巻の一部1743年分の記事が、「立憲自由新聞」に断続17回にわたって訳載されている。掲載紙の名前が「立憲自由新聞」とあるのも、中江兆民から起こった自由民権の運動とルソー熱とが連動していたことを示すものだが、実際その連載に先だって書かれた宮崎晴瀾の序に、

ジャン、ジャック、ルウソウ先生、先生の血、懺悔一記に於て未だ乾ず。詩中応に人有べし、何ぞ囃らん、個中の先生忽にして魔、忽にして仙、而して地の碧を影して其の間に来往せざるなきを、地何んの血ぞ、此日心を捫て涙亦朱なり³。

とあることにも窺われるように、明治20年当時におけるルソーの位置として、やはり政治思想家として、より理解され、遇されていたように思われる。

ルソーの『告白』が全訳されたのは、鷗外訳から11年後、大正元年(1912年)のことである。折しもその年ルソー生誕200年を記念する形での行事が日本に相次ぎ、石川戯庵訳の『懺悔録』も、その機を期して出版されたものと見える。もちろんジャン=ジャック・ルソーの名は、明治末年前後から日本の論壇でその名が挙げられてきてはいるが、たいていは名のみあげて、内容の紹介が伴わないものが多く、その意味で戯庵の訳は画期的なものと言えよう。石川の全訳以後、他の自伝的作品、『孤独な散歩者の夢想』、『ジャ

2 小西嘉幸『『懺悔録』の翻訳と日本近代の自伝小説』、宇佐美斉編『日仏交感の近代 文学・美術・音楽』、京都大学出版会、2006年、28頁。

3 宮崎晴瀾の序文は『鷗外全集』第2巻、岩波書店、1971年、65頁所載による。

ン・ジャック、ジャン・ジャックを裁く』までもが訳出されることになり、ルソーの影響は従来の民権思想界から、ようやく文学の世界に移ってくることになる。

それには明治30年代半ば、1900年以降から覇を称え始めた自然主義文学の「告白」的志向が大きいかかわっていて、何よりも日本自然主義の先駆けともなった島崎藤村の『破戒』（明治39年、1906年）に、その大きな痕跡を認めることができる。

2. 藤村『破戒』における『懺悔録』の意味

その文学的出発を、流麗な七五調で清新な抒情を歌い上げた『若菜集』（明治30年、1897年）、『一葉舟』、『夏草』（明治31年、1898年）、『落梅集』（明治34年、1901年）から始めた詩人藤村は、やがて韻文から散文の世界に歩を移し、いくつかの助走的作品を発表した後、1899年から1905年にかけてのまる5年間の小諸義塾での経験を活かした『破戒』で小説家としての評価を確立する。被差別地域の出身である瀬川丑松が、親友と教え子の少女との支えの中で、自分が被差別の身であることを隠し通すことに苦悩を経て、ついにその桎梏から自らを解くまでの物語『破戒』（明治39年、1906年）は、題材の特殊さもあって大きな反響を呼んだ。

主人公の丑松に大きな影響を及ぼす、あるいはその精神的支柱となるのは、親友や恋人の他に同じ被差別階層出身の猪子連太郎という闘士である、更に言えばその猪子が自己の生涯をあからさまに描き出したという『懺悔録』という著作だ。小説『破戒』の展開において、猪子の『懺悔録』は物語のカギとなる場面で、必ずと言っていいほど言及されている。とはいえ、その語り手の筆は決して猪子が書いたはずの文章に及ぶことはない。丑松の身分を暴くかも知れない危険な書物として、『懺悔録』の名辞そのものが、小説の中で大きな意味を持つのである。

ここにこそ小説家藤村の仕掛けがある。丑松の心の襞に食い入って、物語展開のカギとなる猪子連太郎が著した『懺悔録』は、しかしその実、題名が言及されるだけでその本の中身は引用文が示されることもなく、したがって小説そのものの内容に絡むわけではない。つまり『懺悔録』はイメージ、あるいはイデーとして『破戒』という小説の骨格を作っているのだ。

もとよりその内容についてまったく言及がないわけではない。『破戒』の冒頭近く、その第4節におおよその内容が説明されてはいる。まず猪子が被差別地域出身者である宣言がその本の開巻筆頭に記されていることが説明され、続けて以下のように書かれる。

其には又、著者の煩悶の歴史、歎し哀しい過去の追想、精神の自由を求めて、しかも得られないで、不調和な社会のために苦みぬいた懐疑の昔語から朝空を望むやうな

新しい生涯に入るまで一熱心な男性の嗚咽が声を聞くやうに書きあらはしてあつた。⁴

と丑松の眼に映った形での説明がなされているに過ぎない。しかし、「不調和な社会のために苦みぬいた懐疑の昔語から朝空を望むやうな新しい生涯に入るまで一熱心な男性の嗚咽が声を聞くやうに」とある丑松の感想は、そのままルソー『告白』の冒頭数行の有名な以下の文章を読んだ藤村自身の感想を伝えるものではないか。

余が思ひ起す所は、比類なき事業なり。後の世にもこれを模倣するものあるべからず。余は一個の人物に就て、悉くその天然の真を写して世に示さんとす、而してこの人物は余なり。(略) 縦令余は他より善からずもあれ、余は猶ほ他と殊なり。知らず天公の余を此鑄型に注ぎ込みて、また斯く鑄成したる形を毀ちしは、余が為めに幸なりしや、將た不幸なりしや。此書を読み畢りし人は自ら之を知らん。(略) 余と世を同うせる億兆の民よ、我身辺に集ひ来て我懺悔を聞き、我短の為めには嘆息し、我辱の為めには赧顔せよ。既に聞き畢らば各々玉座の下に跪き、余と同じく平心易気にて心腸を吐露せよ。余は汝等の中一人も、天帝に向て我は渠より善しと云ひ得るものなきを知る。⁵

あるいは、いや、おそらく藤村は、猪子連太郎の『懺悔録』を読んでの丑松の感想の裏に、このルソー『告白』の冒頭部分を読者が想起することを期待していたのではないか。確かに『破戒』は小諸義塾時代、彼が出会った丑松のモデル的な人物から材料を得、それにドストエフスキーの『罪と罰』における酔っぱらいの下級官吏マルメラードフ、その娘の純情にして娼婦に身を落とすソーニャの父娘とラスコーリニコフとの影を、酔っぱらいの老教師風間敬之進と淫蕩な僧の毒牙に会わんとするその娘志保の父娘と丑松とに絡めたことは、二つの小説を並べれば容易に察しがつく。しかし、それはあくまで表面的な小説構成の問題で、この小説の根深いところに、ルソーの『告白』の影響を見ないではない。

たとえば『破戒』における自然描写。登場人物の心情を写すような自然描写は、その発表の当時から有名だが、その一つ丑松が故郷に帰った光景を以下に見てみよう。

山上の日没も美しく丑松の眼に映つた。次第に薄れて行く夕暮れの反射を受けて、山々の色も幾度か変つたのである。赤は紫に、紫は灰色に。終には野も岡も暮れ、影は暗く谷から谷へ拡つて、最後の日の光は山の巔にばかり輝くやうになつた。⁶

4 島崎藤村『破戒』、『藤村全集』第二巻、筑摩書房、1966年、20頁。

5 森鷗外訳、ルソー『懺悔記』、『鷗外全集』第2巻、岩波書店、1971年、67-68頁。

6 島崎藤村『破戒』、前掲『藤村全集』、90頁。

これは、日没と朝の違いはあれ、次のルソーの『告白』の文章に汲むものがあるのではなかろうか。

朝紅が或る朝畜ならず美しく見えたので、慌忙しく着物を著換へて、日の出を見に急いで田畔へ駆けて行つた。私はその嬉しさを十分な魅力の裡に味つた。(略)
大粉飾おめかしした大地は草と花とで掩はれて居た。囀り納めの鶯は、互いに声を競ふかと思はれた。百鳥は合唱して、訣別を春に告げ、楽しい夏の日の生誕を祝福した。⁷

似たような描写をほかにも見出すことはそれほど難しくない。島村抱月が、

また叙景に人事は想はせ、人事に運命を思はせる筆法も、いかにも胸にこたへて、新しい人でなくては此の筆は使はれぬ、と思ふ節あると共に、知功上の分解、作為に陥つた所もある。⁸

と述べたのはまことに炯眼というべきだろう。おそらく藤村はルソーの自然への共感と筆法に、自らのものと同じように感銘を受けていたのだ。

自然描写が二人の作家にとって意味あるのは、二人ともに徒歩旅行の愛好者であることとも関係するだろう。ルソーの当時は馬車が主体ではあったが、庶民はその地を出て旅することは少ない中で、年若い徒弟修業の者たちは、それこそ道具一式をもって徒歩で目的地に向かったには違いないが、とりわけルソーが徒歩旅行を好んだことは、彼の『告白』を読めば容易に理解できるし、その例もまた幾つもあげることができる。藤村も同じように徒歩旅行を好んだことは、小説『春』(明治41年、1908年)や彼の随筆の中にも辿ることができる。また結婚の後、仙台へ赴いて数年の教員生活を送った時は、学校の小使いの農夫に教えてもらって農作業に精を出した。このことはルソーの『告白』6巻にあるル・シャルメットで耕作生活を楽しむ行りの影響があるのだろうか。もとより藤村の中にそうした要素がもともと存在した、ということも言えようが、しかしその行動に何かルソーをなぞる、あるいはなぞろうとする気持ちがあったことも疑いないような気がする。

また『さくらの実の熟するとき』や同じ頃のエッセーで、野の花を見つけて感動するあたり、ルソーのツルニチソウの記述と似通う。つまりそれらの事実は藤村の文学的活動を支える日常の思考の中に、ルソーの『告白』が案外大きな位置を占めていたことが推測されるのである。

7 引用する翻訳文は、『破戒』執筆当時には発行されていなかったが、藤村が後に何度も繙読することになる石川戯庵訳を用いる。先に英訳で読んでいたはずの藤村の頭には、ほぼ同時代の文章が浮かんだと考えるからである。ルソー著、石川戯庵訳『増訂縮刷懺悔録』、第4巻、大日本図書、大正9年、185頁。

8 島村抱月『破戒』を評す。筑摩全集類聚『島崎藤村全集』別巻、筑摩書房、1983年、121頁。

3. 『破戒』に見るルソー『告白』

しかし前段に見たような藤村におけるルソーの類似は、いわば表面的な影響にすぎない。重要なことは、先にも述べたように、『破戒』において『懺悔録』という題名の書物が、小説のキー・ワードとして響く組立てにあり、しかも、それが具体的な形で表明されず、見えざる推進力となっている点にある。いわば被差別部落出身の瀬川丑松を、最後の教え子たちを前にしての告白へと追い詰めていくのが、文中に被差別階級の出身を告白しているという猪子連太郎の『懺悔録』の存在なのだ。

ここにこそ藤村が『破戒』全体に仕掛けた真の意味がある。悩み多い丑松の生活に太い柱をなすのは、タイトルだけで中身が説明されない猪子連太郎の『懺悔録』であり、その『懺悔録』という語に触発されることによって、ある意味で『破戒』全体が丑松の精神的自立への道、いわば丑松自身の自己告白でもあり、丑松のそれを『告白』におけるルソーの生き方と重ねて読むことができる。否、ルソーの『告白』を読んでこそその文学的営為がそこに展開されている、というべきだろう。

では藤村はいつルソーを読んだのか。彼はある時大阪毎日新聞社から「青年の読むべき書物」について問われて、ルソーの『懺悔』を挙げ、知人がアメリカから持って帰ったのを借りて初めて読んだのは「二十三の夏であった」、と述べている。

大阪毎日新聞が、青年の読むべき書物といふ題目の下に、私の処へも回答を求めて来たことがあつた。その時私はルウソウの『懺悔』を挙げて答へた。これは自分の経験から然ういふ回答をしたのだが、私が初めてルウソウの書に接したのは二十三の夏であつた。その時分は今日とは違つて、読みたいと思ふ洋書が書店に来て居ることは少なかつたので、どうかして手に入れたと思つてゐると、恰度村山鳥逕君の兄さんの石川角次郎君（略）が、亜米利加から携へて帰られた書籍の中に『懺悔』があつた。それを頼んで貸して貰つて、一夏かかつて読んだ。

私はその頃、いろいろと艱難をしてゐた時であつた。心も暗かつた。で、偶然にもルウソウの書を手にして、熱心に読んで行くうちに、今まで意識せずに居た自分といふものを引き出されるやうな気がした。（略）吾儕は彼の『懺悔』を開いて、到る処に自己を発見することが出来るやうな気がする⁹。

この文章は、藤村38歳の回顧である。ここで藤村が「『懺悔録』を熱心に読んで行くうちに、「今まで意識せずに居た自分といふものを引き出されるやうな気がした。」と言う

9 藤村「ルウソウの“懺悔”の中に見出したる自己」（『秀才文壇』明治42年（1909年）5月、『藤村全集』第6巻、10頁所収。

のは、そのまま『破戒』の丑松に重ねることができよう。『破戒』は藤村が35歳の時の作品である。したがってルソー『告白』を読んだ時期からすでに10年以上経っている。この長い年月の間、藤村における『告白』は、彼が乾坤一擲の勝負に出た小説『破戒』において、それほど大きな意味を持たせるほど大きな存在であったのだろうか。

それを解くためには、このルソーを初めて読んだ記憶を語る文章をもう一度読む必要がある。この文章は後に石川戯庵の『懺悔録』が出た時に巻末に添えられ、岩波文庫にそれが収められた時にも同じ体裁で添えられた。つまり藤村にとって極めて重要な文章であったのだ。「秀才文壇」に寄せたこの文章において、どれほどルソーの『告白』が彼にとって大きな意味をもったかが書かれているが、しかしここで述べられていない重要な事実を見逃すわけにはいかない。

ルソーを初めて読んだのは23歳の夏だったと藤村は言う。その2か月ほど前、明治27年(1894年)5月18日に北村透谷が自殺している事実がある。藤村自身何度も述べるとおり、北村透谷が藤村に与えた影響の大きさはよく知られている。透谷の自殺直後、藤村は透谷の自宅まで出かけて、年長の友人の遺稿や手紙などを透谷の妻美那と一緒に整理させた。そのことは彼が後々いろいろな書きものの中で言及している。しかし彼にとってそれほど重大な透谷の死について、同じ時期に体験して深い影響を受けたというこのルソーの読書の思い出を述べる文章において触れていないのだ。それはなぜか。おそらく、それだけ透谷の死とルソー『告白』が、二重にしっかりと重なり、結びついていて、そのことの言及をかえって避けさせたのではなかっただろうか。

それは藤村が透谷の遺稿整理中に見出した、透谷の妻への手紙、正確には結婚前の石坂美那への書簡に答えがあるように思われる。

4. 透谷の石坂美那宛書簡

その書簡は明治20年(1887年)8月18日付のもので、北村透谷は19歳。恋人石坂美那に宛てて、まず以下のようにこの手紙執筆の所以を説く。

嗚呼若し生をして一の大家たるを得るあかつきありと念はしめば、生は今に於いて己れの履歴を語るの必要なるべし、生は寧ろ堂々たる自伝を玉の如き名筆を以て書き始む可し、然れどもその望みなしとせば、生はしばらくの間、おもしろき想念を持ちたる事を匿さず白状するこそ能けれと思ふなり、げに生の生活は世の有為の少年の爲めには一部の警戒書となるべし、生の失敗は以て彼等に示すべし、秘し隠す可き者にあらず、(略)¹⁰

10 『透谷全集』第3巻、岩波書店、1955年刊、161頁。



図1 Benjamin Disraeli, *Contarini Fleming*, Edward Moxon, vols.1-4. 1834、神戸女学院大学図書館蔵。



図2 福地源一郎、塚原靖訳述『昆太利物語〈上篇〉』（リプリント日本近代文学）国文学研究資料館、2008年8月刊。

透谷が自分の半生を振り返って秘匿することなく語る、という言葉、それは先に引いたルソー『告白』の冒頭の言葉を思い起こさせ、「堂々たる自伝を玉の如き名筆を以て書き始む可し」という言は、あたかもルソーの『告白』を頭においての言葉のように響く。あるいは透谷はじっさいルソーを読んでいたのではなかろうか。というのも透谷の自らの半生を回顧する文章の叙述にはルソーの『告白』と比較して注目すべきものがあるからだ。それはたとえば、

偕て明治十一年の春となり、我がやかましき祖父は中風病にかかりて、其性質は全く一変し、生を叱責するの性は変じて生を憐愛するの情となれり¹¹。

あるいは、

翌十六年三月、生は早稲田なる東京専門学校に入学したり、生は常に学問の仕方は自ら脩め自ら窮むる禅宗臭い説を持ち居りけり、されば学校在りても教科書をしらべんよりは数多の書史を涉獵するこそ面白しと、日々書籍室に入りて鬱を慰め居りけり、
(略)¹²

11 同、161頁。

12 同、167頁。

など、年譜風に、簡潔ながら内容的に優れた自伝的文章が続く。色川大吉によれば、英国十九世紀の著名な政治家で多くの小説も書いたベンジャミン・ディスレーリ（1804－1881年）の「コンタリニ物語」を下敷きにして、透谷がこの自伝的書簡を綴った、という。

明治20年（1887）透谷はジスレーリの「コンタリニ物語」などを下敷きにして、書簡の形式とはいえ、当時としては斬新な自伝的創作の第一歩を歩みだしている。それは単なる“愛の書簡”の形式を越えた近代的な自己告白文学の芽生えとすら評価できる¹³。

問題の「コンタリニ物語」とは1832年エドワード・マクソン刊のベンジャミン・ディスレーリ『コンタリーニ・フレミング』 Benjamin Disraeli, *Contarini Fleming* 全4巻（図1）からなる小説で、その翻訳は福地源一郎（桜痴）、塚原靖（渋柿園）により『昆太利物語』として明治20年7月に新聞連載、明治21年に3巻本で刊行されたものがある。（図2）この翻訳と透谷の文章とを比べて見れば、どうして透谷の文章がディスレーリ的小説から出てきたと推測されるのか、いささかいぶかしく思われてくる。というのも、この小説は冒頭の文章こそ、以下に示すように、主人公コンタリーニ・フレミングの生い立ちの話が出ては来るものの、あとは彼がイタリーに赴き、冒険を政治的な脈絡で展開している長編であり、透谷の簡潔な年譜風の記録記事とは全く異質のものという印象が強いからだ。

予が父ハ壯年の頃伊太利の威尼斯に僑居したる事ありて其折り同国の貴族昆太利家の娘と婚姻し一人の男子を設けたるがこの男児は即ち予なり故に予が名は母方の姓に因みて昆太利とは云ふなり。予が母は予を産みたる後数年ならずして身逝りたれば父は予を携へて此國に来たり後妻を迎へたり¹⁴。

とあるように、コンタリーニは自分が生まれたために、産褥の母親が亡くなった、というのは、ルソー『告白』冒頭の有名な事件を思い起こさせる。おそらく作者ディスレーリはこの「一つの自伝」と銘打った作品に、ルソーの『告白』の影を落とさせたのだろう。しかし以後の展開はルソーの告白とも、もちろん透谷の短い自らの半生を顧る文章とは相似するところはいっそう少ない。あるいは透谷の次の文章に、

13 色川大吉『北村透谷』、東京大学出版会、1994年、14頁。

14 Benjamin Disraeli, *Contarini Fleming*, Edward Moxon, vol.1, 1834, p.2.

福地源一郎、塚原靖訳述『昆太利物語〈上篇〉』（リプリント日本近代文学）国文学研究資料館、2008年8月刊。19－20頁の訳による。実際のここの原文を拙訳で示せば、「ヴェニスで、まだ若かった彼は、コンタリーニ家の娘と結婚し、その結婚から生まれた唯一の子供が私というわけだ。しかし私のこの世の誕生は凶事でもあった。というのも私の母は私を産み落とす際に、自分の命を犠牲にしてしまったのだ。」と塚原らの訳文とは多少異なる。

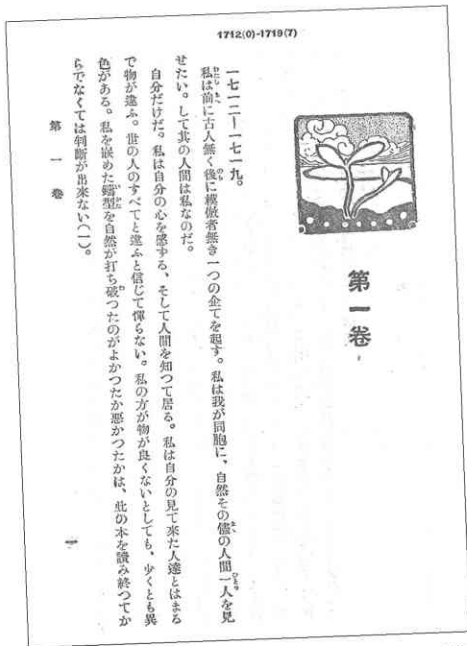


図3 ルソー著、石川戯庵訳『増訂縮刷懺悔録』、大日本図書、大正9年、第1巻、第1頁。

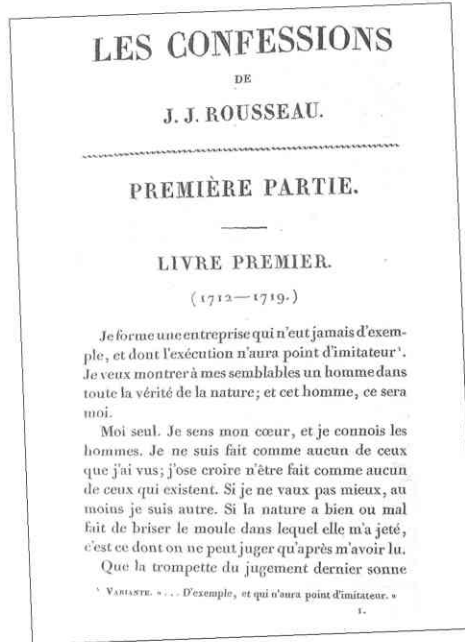


図4 *Les Confessions*, dans le tome 17 des *Œuvres complètes* de J. J. Rousseau, Dalivon, Paris, 1824.

或日飄然として家を出て、懐中には一銭の金をも持たずして東海道を徒歩し、鎌倉に遊びたり、抑も鎌倉は詩人に取りてのイタリーの如く、最も生の渴望して一見せんと欲するの土地なりし、何となれば其頃生の日常読む所は重に日本の歴史にして、其歴史中最も重要な事件は彼地に於て演ぜられたればなり¹⁵

とイタリーに言及する記述にあることが、ディスレーリの小説がイタリアで展開することから、その類似を思わせるのかも知れない。しかし『コンタリーニ・フレミング』の邦訳『昆太利尼物語』が福地源一郎、塚原洪柿園の訳で新聞連載が始まったのが明治20年7月、透谷の手紙が同じ年の8月18日、そのわずか1か月前で、そんなにすぐに影響されるものでもないだろうし、実際の内容も、ほとんど関係がない。第一引用文を較べてみれば、透谷の文章に各事件を述べる前に、いちいち何年とはっきり記す年代の表記がディスレーリの訳文には見られない。透谷の美那宛ての手紙の特徴は、それぞれのエピソードが起こった年を明らかにして記述することだが、ディスレーリ的小説にはそういうところはなく、透谷がこのヴィクトリア朝小説の展開に範を取ったとは到底考えられない。では透谷の年代を伴った表記はどこからきているか。

15 北村透谷、前掲書、165頁。

もちろん透谷が話頭に年号を付すのは、漢学流の「年譜」の体裁を取ったとも言える。しかし年譜の事実本位に単純に記述するスタイルとは異なって、透谷の文章は情趣豊かなものがある。そこにはルソーの『告白』の文章が関わっているのではなからうか。

先に透谷が書簡の前書きに自己の半生を振り返って「秘匿することなく語る」、とある言葉がルソー『告白』の冒頭のを思い起こさせ、「堂々たる自伝を玉の如き名筆を以て書き始む可し」という言も、ルソーの『告白』を頭においての言葉のように響く、と述べた。さらに透谷の半生の回顧の文章において、年代を記した後にエピソードが語られるスタイルは、ルソーの『告白』のそれに重なる。森鷗外訳の『懺悔記』、石川戯庵訳の『懺悔録』のいずれを見ても、各章の最初に「～年から～年」あるいは「～年」といった年号の記載がされていて(図3)、透谷はルソーのこうしたスタイル、事件の起こる年代をまず記してから述べるスタイルを模して、たとえば「偕て明治十一年の春」とか「翌十六年三月」というように書きだしたのではないかとさえ考えてしまう。

ところがそうした翻訳における年代表記が見られる鷗外訳、石川戯庵訳ともに、いわゆる「小野道風の書ける和漢朗詠集」の類で、「時代や違いはべるらむ」、いずれも透谷の手紙の方が翻訳が出るより先に書かれているのだ。それとフランス語版のルソーのテキストには、じつは1822年から1825年にかけて刊行されたルソー全集のテキスト(図4)のほか、年代の表記のあるものは管見の範囲で見出せない。もちろん英訳のものにも、年代表記が記されているエディションは少ない。しかし少なくとも鷗外も石川戯庵も年代の表記がある。おそらく読者の便宜を考えて、各章の表題の後に事件の起こる年代を記した独訳あるいはフランス語のエディションを底本にしたのだろう。

いずれにしてもルソーの『告白』のスタイルを透谷が模した、とすれば、あるいは年代の標記のある英訳によってではないか。色川大吉はその著『北村透谷』の中で、

透谷はこうして開港場横浜の雰囲気慣れ、実践的な英語を学び、早稲田の英文科に入って英語力をさらに高めたので、当時の世界文学の一流作品を翻訳を通してではなく、直接読み解くことができた。¹⁶

と、少年透谷が英語に堪能であったことを述べており、透谷自身も早稲田の図書館で本ばかり読んでいたと恋人美那に伝えてもいる。その読書に英訳ルソーが入っていることは十分想像されることだ。というのも、少年時民権運動に奔走した透谷は、「兆民先生安くにかある」という文章で述べるとおり、中江兆民への関心と尊敬を露わにしている。そういう透谷が兆民が紹介するルソーの著作に関心を持たないはずはないだろう。透谷はこう書いている。

16 色川大吉『北村透谷』、東京大学出版会、1994年、12-13頁。

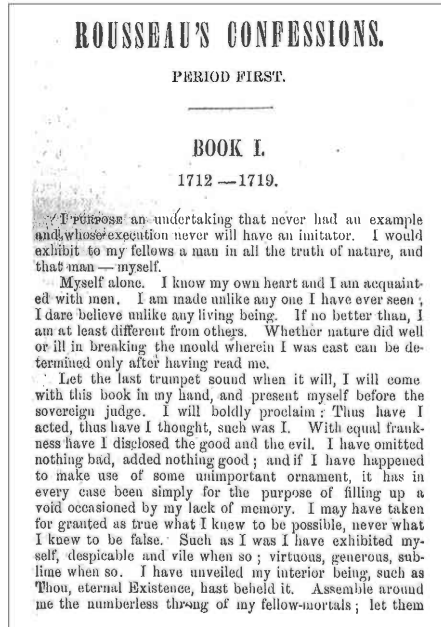


図5 Rousseau's *Confessions*, Blanchard, New York. 1857.

多くの佛学者中に於いてルーソー、ボルテールの深刻なルソー思想を咀嚼し、之を我が邦人に傳へたるもの兆民居士を以て最となす。(略)バイロンの所謂暴野なるルーソー、理想美の夢想家遂に我邦に縁無くして(後略)¹⁷

ルーソーの名が透谷が残した文章に出てくるのはこの一文のみだが、ここで「バイロンの所謂暴野なるルーソー」とあるのは、ルーソーについての透谷の高い関心を示すものだ。彼の高名な自伝をおそらく読んでいたに違いない。

しかし透谷がルーソーを読んでいたかどうか、さらには透谷の問題の手紙にルーソーの『告白』の影が見られるかどうかは、実はそれほど問題ではない。藤村とルーソーの関係を考える上で、この透谷の婚約者に宛てた自伝的文章は決して見逃しにできないものがある。透谷の死の直後に彼の妻美那に頼まれて遺稿の整理にあたった藤村は、この手紙をその中に見出したはずだ。そして我々が感銘を受けたように、藤村が尊敬する透谷の手紙は彼にとって強い印象を与えたに違いない。彼はその時のことを北村透谷の27回忌に寄せた文章の中で以下のように述べている。

17 北村透谷「兆民先生、安くにかある」、1893年9月30日。『透谷全集』第2巻、岩波書店、1955年、310-311頁。

透谷の亡くなった後、私はあの二階へ上つて友人の遺した反故を調べてみたことがあつた。細君が取り出したいくつかの葛籠の中からは、種々の反故やら、書きかけの古い草稿やらが、部屋中一ぱいになるほど出て来た。(略) その時私はあの友人がまだずつと若かつた頃に石坂嬢に宛てたといふ長い手紙を読んでみた。(略) それには自己の少年時代のことが飾るところなく長々と叙してあつて、自己の将来の希望を語るように書いてあつた。あれはめづらしい手紙だ。¹⁸

この手紙は透谷との交遊を中心に描いた小説『春』でもそっくりそのまま引かれていて、藤村の受けた印象の強烈さを示している。透谷研究のきわめて重要な資料でもあるこの恋人美那に宛てた透谷の手紙は、藤村を研究する立場から見てもいっそう興味深いものがある。というのも先ほど引用した藤村がルソー『告白』の読書を回顧する文章に、その数か月前に彼の尊敬する透谷が自殺したことが、すっぽりと抜けているからである。藤村はルソーの『告白』英訳本をアメリカ帰りの友人から借りたと言っている。¹⁹ 先述のようにルソーの英訳本にも各章に年代が記されていないものが多いが、年代が記されている版もある。ニューヨークの出版社Blanchardから1857年に出た英訳本には図5で示すように年代が記されている。はたして藤村が読んだ英訳本がこれと同じものかどうかはわからないが、もしその英訳本が図5と同じように各章ごとに年代が記されていたとすれば、藤村はつい数か月まえに感銘をもって読んだ透谷の自伝風の手紙とスタイルが重なるルソーの『告白』の文章に強い刺激を受けたのは間違いない。そしてそこに新しい自己の覚醒と自己の文学の進むべき道を示唆されたのではないか。十川信介がこの頃の藤村について、

藤村はすでに前年にドストエフスキー『罪と罰』、およびJ・J・ルソー『告白録』を読んでいた。「ルウソオの『懺悔』中に見出したる自己」(『新片町より』明42・9)には、透谷の『エマルソン』の名が挙げられていないが、前年10月、最初の『透谷集』を編集・出版した彼が、心血を注いだ透谷の最後の著作を読み返さなかったはずはない。彼はあまりに近いと感じていた透谷の文章を下敷にして、『告白録』によって自己を確立し、恐れることなく告白する勇気を得たのである。²⁰

と、藤村における透谷の影とルソー体験が、きわめて大きいことを述べている通りである。

しかし藤村自身はそのことに一切触れていない。触れていないことが、実はかえつ

18 島崎藤村「北村透谷27回忌に」、『藤村全集』第9巻、筑摩書房、1967年、37-38頁。

19 図5の英訳本は竹友藻風(1891-1954)旧蔵書で、恐らく米国留学の際買ったものだろう。

20 十川信介『島崎藤村』、ミネルヴァ書房、2012年8月、40頁。

て藤村にとって透谷の遺稿とルソーの『告白』との密接な関係を示すだろう。藤村には肝心な点について沈黙を守る癖があることは、これも十川が、

「彼（藤村）自身はあったことを無かったように書く小説家だった。自伝的長編にその傾向が著しい」と書いていることに注意すべきである。²¹

と述べている通りだ。

そして藤村がルソーを英訳で読んだその4年前に、一部分ではあるが鷗外による本邦初の翻訳が出ている。鷗外が初めてルソーの *Confessions* を『懺悔録』（明治二三年）と訳したことは、ルソーのその後の『告白』受容に大きな意味を持ったように思われる。「懺悔」という日本語は、罪を意識して、その罪を自ら暴いて裁きを乞うイメージがある。ルソーの *confessions* には日本語的な『懺悔』の意味はほとんどなく、文字通りの「告白」、真実の吐露としての告白なのである。しかし佐藤春夫の言うように、²²鷗外編訳『於母影』を深く読み込むことによって詩人として出発した藤村が、当然鷗外訳『懺悔録』に眼を通したに違いなく、その下地の上に、さらには透谷の自伝、そしてルソーの英訳に接することによって、散文家として自己表現する方向を定めて行ったのだ。

5. 『破戒』から『春』へ

そのことは『破戒』に続く『春』において具体的に示されることになる。『春』は一般に『文学界』時代の藤村の交友関係を描いた青春小説と位置づけられているが、この作品も藤村における透谷の自伝的書簡、ルソー『告白』の文学的経験という流れに置けば、藤村が『懺悔録』を下敷きにして丑松という青年を造形、丑松の〈告白〉で終わるテーマ小説として『破戒』を書き上げたのに対して、『春』は北村透谷をモデルにした青木をはじめ、星野天知や戸川秋骨、馬場胡蝶、平田禿木といった多くの青春の友人たちの群像を配して、作者藤村の本格的な自伝小説、告白小説へと踏み込んだ作品となった。その中では登場人物がそれぞれ誰と察しが付くように描かれて、作中の「岸本」を「私」と置き換えれば、そのまま藤村の青春白書になって、それこそ明治25年から明治30年、と年号を付して書かれる藤村版『告白』の数章として読むことができる。

この『春』において、藤村は透谷の手紙や遺稿はもとより、『文学界』同人の青年たちの愛誦詩などを、ほとんどそのまま潤色することなく挿入することによって、生々し

21 同書、102頁。

22 「藤村は鉄幹とともに『於母影』の鷗外の最も優秀な徒弟であっただけではなかったか」と見る。(略)『藤村詩集』は『於母影』を父とし藤村を母として生まれた詩集である(後略)、佐藤春夫「詩人島崎藤村評伝」(昭和23年1月)、『佐藤春夫全集』第23巻、臨川書店、1999年、11月、151-152頁。

い現実感を出すことに成功している。「事実」に基づいた、こういうあからさまな過去の暴露は、従来の日本文学には無かった手法で、おそらくはルソーの『告白』のスタイルから藤村が学んだものと思われる。ルソーが『告白』を執筆することになるその動機は、彼が友人として親しく交際した者の彼に対する誤解や中傷、その他自分が社交界や論壇において不当に扱われているように思われることへの、ルソーの切羽つまった弁明としてであった。彼はその自己の正当性、事実の真实性を保証するために、『告白』執筆を意図した折から、自分が書いて送った手紙や相手からの返事や文章を集めることにし、それらを文中に多数引用した。

藤村は『春』を書く前年、「並木」という小説を書き（明治40年、1907年）、その中でモデルとして扱われた馬場弧蝶や戸川秋骨から、それぞれ痛烈に非難されることになる。当時は文学を廃して日本銀行に勤める身となった弧蝶、学校の教師となった秋骨、いずれも小説の中では、かつての青春の文学青年の落魄した境涯と、森田草平をモデルとした人物たちの新しい潮流に押されて、時代に取り残されていくかのような自分たちを歯がゆく思う姿で描かれて、不愉快な思いをしたに違いない。二人ともに、藤村の短編発行の3か月後に、馬場は「島崎氏の『並木』」、戸川は「金魚」という文章で藤村を揶揄、批判した。

信頼している友人たちからの思いがけない反応。おそらく藤村は『告白』に綴られた友人たちから非難、忌避されるルソーを自分に重ねたに違いない。ルソー『告白』に倣って、具体的な客観的資料の収集と対象を離れて観察に徹する態度、そうした友人たちの生活を掘り下げ、彼らと交わる自己の分析と自己の立場の擁護、あるいはそのことによる自己の成長を、小説の形で記録していく道を選んだのだ。『春』という作品は、それとははっきり言わないまでも、透谷およびルソー『告白』の流れから触発された自己発揚であった。透谷、すなわち青木の描写が『春』の大部分を占めるのも当然のことだ。『春』には藤村の青春の彷徨の足跡もまた記録されている。自然への同化を試みる徒歩旅行は、またルソーが好んだものだった。ここでもルソーの『告白』の影が落ちていることに注意しておく必要があるだろう。

6. 『新生』の意義—ふたたびルソー『告白』へ

田山花袋の『蒲団』は藤村の「並木」の3か月後（明治40年9月）に発表され、さらに藤村の『春』が翌年開始されるや、日本の文壇は雪崩を打ったように「告白小説」へと向かうことになる。花袋の『蒲団』が、純粋な作家自身による告白小説の態を取りながら、実は彼が尊宗したフランスの自然主義作家エミール・ゾラの『作品』*Œuvre*（明治19年、1886年）に趣向を得たものであることは、すでに他の場所で述べたので再説し

ないが、藤村の『春』の場合は、ルソーを意識した文字通りの「私のコンフェッション」であって、以後こうした「わたくし」小説が日本の本流のようになるのは、日本文学史の教えるところである。

藤村は『春』に続く『家』において、より客観的な小説、自己の告白のそのままの続きではなく、その自己形成の元となった「家」の解剖に繋げる試みに着手する。もちろんモデルとなる人物像、「家」の原型は、彼と彼の周囲と「島崎家」であるが、そうかといって『家』における小泉三吉を、私小説流にそのまま「私」の文字に置き換えてしまえば、まったく別物の作品になる。『家』は藤村やその周辺をモデルとしながら、藤村個人を離れた「客観的な主人公小泉三吉」と、その周辺を通して描かれた近代社会小説としての骨格が、そこにみごとに出来上がっている。

おそらく藤村はこのまま『家』で示した封建地方紳士の一族の衰亡の上に、もっと大きなテーマへと飛躍するつもりだったに違いない。ところが彼の想定外の事件が発生することになって、彼は再びルソーの『告白』をなぞらなければならなくなる。『春』完成とほぼ同時に妻を失った彼は、家事と育児の手伝いに来た自身の姪（次兄の次女）と事を起こしてしまったのだ。ルソーから離れて新しい文学境地に進むべき時に、再びルソーの『告白』を思いおこさねばならぬ皮肉。

どういう事件が藤村と姪の間にあったのか。『新生』の作中には具体的には明かされていない。藤村において、『破戒』における猪子連太郎が書いたとされる「懺悔録」の中身の沈黙や、その他肝心要の点は、実は秘匿されていることが多いことは、藤村研究者の指摘するところで、それは読者が想像するしかない。そこに藤村の文学の特色、あるいは藤村文学を解く鍵があるが、今はそのことに触れる余裕はない。

『新生』の文章を見る限り、手伝いに来ていた姪を、おそらくは一瞬の欲望から手籠め同然の形で関係を結んだのではないか。その時姪に対する恋愛感情はなかったように思われる。しかし藤村は娘の告発を恐れた。いつ二人の関係が明るみになるか。姪の妊娠は嫌でも日が経てば彼の罪を暴く客観的な証拠となる。彼は日毎汗をかくような思いをしたことだろう。そしてルソーの『告白』の第2巻、少女を欺いた後の後悔に悩まされる以下の文章を、切実な気持ちで思い出したに違いない。

此の切無い思ひ出に時々私は悩まされ、まさしく昨日犯した罪でもあるやうに、此の哀れな娘が私を責めに来るのが寝覚めに見える程私は悶える。(略)何かの著作で私の言つた、悔恨は得意の間は熟睡し、失意の時に至つて蹶起するといふことを思ひ知るのである。²⁴

23 柏木隆雄『交差するまなざし—日本近代文学とフランス—』、朝日出版社、2008年、120-123頁。

24 石川巖庵訳増訂縮刷『懺悔録』第2巻、大日本図書、大正9年、114頁。

彼はそれこそルソーが書くように、「此の哀れな娘が私を責めに来るのが寝覚めに見える程私は悶える」状態だったのではなかったか。

そんな事情を知らない同郷の友人中沢臨川の洋行を勧める言葉に便乗する形で、藤村は日本を脱出、フランス行を決行する。なぜフランスか。もちろんフランスが当時の文学者、芸術家たちにとってあこがれの地だったからもあるだろう。しかしそれ以上に、フランスはルソーと結びつく国であったからではないか。彼が渡仏の重い鞆に石川戯庵訳の『懺悔録』を携えて行ったのはよく知られている。藤村はフランスでその言語を読めるよう熱心に学習したという。パリに着いてからも、その滞在中、他の同胞が感心するくらいに熱心に、真面目に、紹介されたフランスの老嬢のところでフランス語の勉強もしている。

戦争を避けてのリモージュへの移動を含めて、およそ2年半のフランス滞在を終えて帰国する船の中で、彼はルソーの『新エロイズ』を読んでいる。それは黄色い表紙の本、とあるから、おそらくは昔のクラシック・ガルニエ叢書の本でもあろうか。そういえば『破戒』で丑松が読む猪子連太郎の『懺悔録』も、黄色い表紙としてあった。それは偶然かも知れないが、猪子の黄色い『懺悔録』と合わせて、あるいは藤村が読んだルソーの『告白』の英訳本も黄色い表紙のものだったかもしれない。帰国の後、彼は『新生』と題して、文字通り姪との愛欲事件を「告白」あるいは「懺悔」する小説を発表する。

『新生』というタイトルは、ダンテの詩編に由来するという意見もあるが、しかし『破戒』の中に次のような文章があることを思い起こしてほしい。

不調和な社会のために苦みぬいた懷疑の昔語から朝空を望むやうな新しい生涯に入るまで—熱心な男性の嗚咽が声²⁵を聞くやうに書きあらはしてあつた。

これは丑松の精神的支柱である猪子の『懺悔録』について書かれた文章である。それから4年後の『新生』において、再び「新しい生涯に入る」ための「熱心な男性の嗚咽が声²⁵を聞くやうに書きあらは」されているのは偶然ではあるまい。

上の引用にも見られるように、藤村において、ルソーの文学は『破戒』から『春』、そして『新生』へと大きな意味のつながりを与える大きな存在であることが、よく理解されるはずだ。藤村の『新生』においては、ルソー『告白』だけでなく、『新エロイズ』の純愛、そしてその小説のタイトルの元となった中世の師と女弟子との禁じられた恋愛（それは女弟子の妊娠にまで至った）を綴った書簡集『アベラールとエロイズ』もまた大きな影を落とすことになるが、それは他日稿を改めて述べよう。ただこれまで明ら

25 島崎藤村『破戒』、『藤村全集』第2巻、筑摩書房、1966年、20頁。

かにしてきたように、ルソー『告白』と透谷の自伝的書簡、そして藤村の「私小説」という一連の流れを象徴するかのような文章を、『新生』第一部の最後に見出せることを今回の結論に代えて述べておきたい。

其晩、岸本は遅く部屋の寝台に上った。枕に就く前にも、床の上に半ば身を起こして居て、若い自分の友達のことや、自分の青春時代のことを思い出した。あの早く世を去った青木に別れた時から数えると、やがて二十年近くも余計に生き延びた自分の生涯を胸に浮かべてみた。彼は唯持って生まれたままの幼い心でその日まで動いてきたと²⁶考えていた。気がついてみると、どうやらその心も失いかけていた。

青木すなわち北村透谷が話題にされるのは、『新生』においてはこの一か所だけである。しかし物語の前半を締めくくるこの文章に、青木、すなわち透谷が登場するのは意味深長だ。『破戒』や『春』におけるのと同じように、ルソーの『告白』が、この『新生』においても物語展開の大きなキー・ワードとして見え隠れに働いており、それをつなぐ北村透谷の存在が大きく作者にのしかかっている点で、藤村におけるルソー体験、透谷存在の大きさを、この一文ははっきりと物語っている。

26 島崎藤村『新生』第一部、『藤村全集』第7巻、筑摩書房、1956年、234頁。